

# 植物を取り扱う市民・学生へのアンケートを通してみる七草文化の伝承

崔 至鎔<sup>1</sup>・松尾英輔<sup>2</sup>・浅野房世<sup>2</sup>

<sup>1</sup>三星 EVERLAND 株式会社 環境開発事業部 <sup>2</sup>東京農業大学バイオセラピー学科

## Questionnaire Survey of Plant-oriented People on Transmission of Japanese Nanakusa Tradition

<sup>1</sup>Jiyong CHOI, <sup>2</sup>Eisuke MATSUO and <sup>2</sup>Fusayo ASANO

<sup>1</sup> Environmental Development Div., Samsung Everland Inc.

<sup>2</sup> Department of Human and Animal-Plant Relationships, Tokyo University of Agriculture

### Summary

This questionnaire survey, with 825 respondents at 30 locations, was designed to investigate how the Japanese 'Nanakusa' culture (i.e., 'of the seven spring herbs and the seven autumn flowers') has been passed down from one generation to the next. Nanakusa is a very old tradition in Japan, dating back more than 1,000 years. It celebrates the role of plants in human well-being through the seasons, both for culinary/edible/dietary and aesthetic/ornamental/ medicinal purposes. Most of the respondents came to know Nanakusa culture tradition at home, before they were fifteen years of age. Many of them had eaten the Nanakusa-gayu (a rice porridge with Haru-no Nanakusa, i.e., seven spring herbs: *Oenanthe javanica* DC., *Capsella bursa-pastoris* (L.) Medik., *Gnaphalium affine* D. Don, *Stellaria media* Cry., *Lapsana apogonoides* Maxim., *Brassica rapa* L., *Raphanus sativus* L.). Also they had seen arrangements of the Aki-no nanakusa (seven autumn flowers: *Lespedeza bicolor* Turcz., *Miscanthus sinensis* Anderss., *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi, *Dianthus superbus* L., *Patrinia scabiosaefolia* Fisch. ex Trevir., *Eupatorium japonicum* Thunb. ex Murray, *Platycodon grandiflorum* (Jacq.) A. DC.) at home. During childhood, it had been arranged in their families, in most cases, by their mothers. The results indicate that the childhood experience of the Nanakusa culture tradition celebrated by the mothers at home played an important role for the respondents in familiarizing them with the seven spring herbs and the seven autumn flowers. It resulted in a continuing interest in this tradition.

**Keywords:** Seven spring herbs, seven autumn flowers, traditional culture,  
rice porridge with seven spring herbs, childhood experience with Nanakusa  
春の七草, 秋の七草, 七草粥, 伝統文化, 子ども時代の体験

### はじめに

人と植物とのかかわりの一つとして知られた行事に七草がある。春の七草は正月7日に七草粥を作って食べる。秋の七草は飾って観賞する季節の花として知られているが、東洋医学では生薬として使われてきた(天津中医药大学日本校, 2008)。これらは、奈良時代あるいは平安時代に成立し(斎藤, 1977; 斎藤ら, 1992; 青木, 1999)、いまなお季節を象徴する言葉あるいは行事として話題になる(鳥羽, 2006)。しかしながら、食べ物や花の生産が季節とは必ずしも一致しなくなった昨今、七

草がどれほど市民の暮らしの中に根差し、なじみのあるものであるかは疑わしい。これに関連して崔ら(2003)は、春の七草の知名度はほぼ70%、秋の七草のそれは30%程度と報告している。市民はどのように七草を知り、種類を覚え、行事の伝承はどのようになされているのであろうか。

本研究では、七草の認知と体験の実態を調べ、七草を学び、伝承するうえで果たしている体験や家庭、学校、地域社会の役割を探り、身近な植物とのかかわりに関心をもち、馴染みをもてるようにはどうすればよいかを考察した。

2008年3月30日 受付. 2008年7月18日 受理.

## 1. 調査ととりまとめ

本研究では、アンケート方式（選択方式、複数回答が可能な設問もあった）によって、春の七草を知っているか、いつ頃、どこで、どのように知ったか、七草粥を食べたか、それを誰が作り、誰が飾ったか、秋の七草を飾ったかあるいは見たか、春と秋の七草とはなんという植物か、を尋ねた。

調査は2001年から2006年にかけて、延べ30会場（大学・短期大学における園芸関係の授業や一般社会人を対象とした園芸療法、園芸福祉などの講演会の場）の参加者に対して行われた。調査地は九州（福岡県、宮崎県、長崎県）を中心に、広島県、兵庫県、大阪府、三重県、岐阜県、神奈川県、新潟県に及ぶ。有効回答者825名の内訳は、学生306名、社会人519名。性別にみると、男性375名、女性433名、性別不明17名であった。また、年代別にみると、10～20代369名、30～40代186名、50代以上250名、不明20名であった。

データの解析にあたっては、性別、年代、地域などによる違いなど、さまざまな視点が考えられるが、本論文ではまず、回答者全体としてどのようなことがいえるかを探った。

七草を知っているかという問いに対しては、七草の種類を知っている人と種類は知らないがそのような行事があること、そういわれる植物があることを聞いたことがある人まで含まれるが、本調査ではその区別はせず、「知っている」「聞いたことがある」回答者を「認知」している回答者として取り扱った。

## 2. 七草の認知、その時期、場所あるいは媒体

「知っている」回答者は、春の七草77.0%、秋の七草41.6%であり、これに、「聞いたことがある」という回

答者を加えた、いわゆる七草を認知している回答者は、春の七草では98.7%、秋の七草では77.4%となった。逆にみると、「知らないし、聞いたこともない」回答者が春の七草では1.3%であったのに対して、秋の七草では23.6%とほぼ20倍であった（データ省略）。

七草を認知している回答者に認知した時期を尋ねたところ、第1図に示すように、春の七草では「小・中学校時代」がもっとも高く、「小学校に入る前」、「高校・大学時代」、「社会人になってから」と続いた。秋の七草では、「小・中学校時代」がもっとも高く、以下「高校・大学時代」、「社会人になってから」、「小学校に入る前」の順であった。このように、いずれの七草についても、認知した時期は、小・中学校時代までの幼少期という回答者が多く、社会人になってからという回答者は少ない。

この時期に七草を知るあるいは聞く機会といえば、家と学校、さらには、新聞・テレビ・ラジオなどのマスコミが考えられる。そこで、その場所あるいは知った媒体を尋ねてみると、春秋いずれの七草についても「家・実家」という回答がもっとも多く（第2図）、次いで「学校」であるが、その割合は「家・実家」の半分以下であった。以下、新聞・テレビ・ラジオ、雑誌・書籍の順である。つまり、新聞・テレビ・ラジオなどのマスコミで七草に関する情報は流れていても、一般にアニメや漫画などに関心の強い子どもには、インパクトを与えるものではなかったものと考えられよう。

これらの七草を認識した時期と場所や媒体に示された結果は、いずれの七草についても、回答者の多くは、学校や社会人になってから家族以外の人々との交流を通してよりも、小・中学校時代までの家庭生活のなかで認識したことを示している。

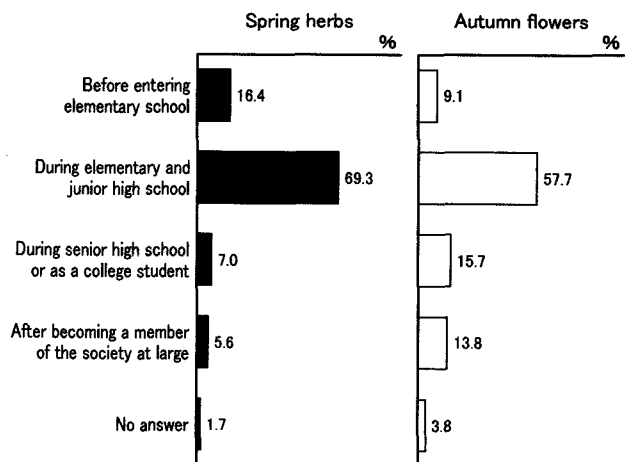


Fig. 1. Responses in percent to the question: "When did you first learn or hear about seven spring herbs and autumn flowers culture?"

第1図. 七草について、いつ知りましたか、聞きましたか。

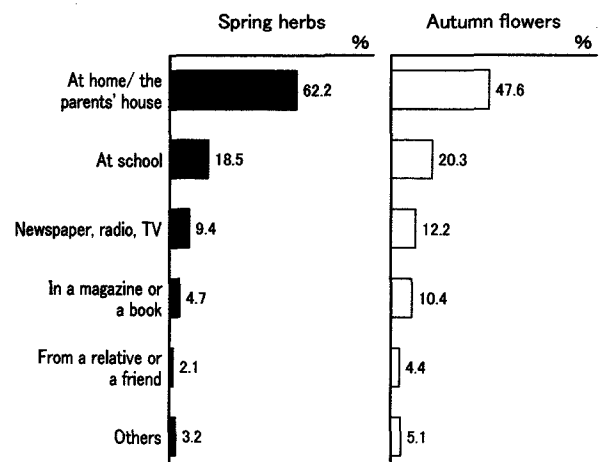


Fig. 2. Responses in percent to the question: "Where or how did you learn about seven spring herbs and autumn flowers culture?"

第2図. 七草について、どこで知りましたか、聞きましたか。

### 3. 七草体験の有無と知名度

「習うより慣れよ」「百聞は一見にしかず」という言葉にも示されるように、学びには体験が大きな意味をもつ。また、幼少期の体験が、園芸好きな学生や生徒を育て（松尾, 1994; 山本ら, 2006）、大人になってからの自然志向にも表れる（Lohr and Pearson-Mims, 2002; Lohr, 2004）というように、幼少期の体験の重要性が知られている。

そこで、認識していることと七草の体験すなわち七草粥を食べたことや秋の七草を見たり飾ったりしたこととの関係、あるいは、その体験と七草種類の記述数（知名度）との関係を探った。

まず、認識している回答者のなかで、春の七草を用いた七草粥を食べた回答者（春の七草体験者）はかなり高率であるのに対して、秋の七草を飾ったり、見たりした回答者（秋の七草体験者）はかなり低い（第3図）。このことは、知名度（記述数の多少）が春の七草では高く（多い）、秋の七草ではそれより低い（少ない）という事実（崔ら, 2003）と関係していることを示唆する。

そこで、体験と知名度との関連を明らかにするために、体験者（Experience）と非体験者（No experience）が七草を実際にいくつ記述できたかについて、ANOVA分析の結果を示したのが、第4図である。七草を「知らないし、聞いたこともない」（No knowledge）という回答者が、春の七草では体験者（Experience）と非体験者（No experience）、秋の七草では体験者にいたが、いずれも数名以下であったので、統計処理から除いた。

春の七草では、同じ「認識している」（Knowledge）という回答者でも、体験者の記述数が非体験者のそれよりも多かった（第4図）。秋の七草でも、同じように、七草を認識している体験者（Experience-knowledge）は非体験者（No experience-knowledge）より多く記述していた。体験がなく「知らないし、聞いたこともない」（No experience-No knowledge）という回答者の記述数は非体験者のそれよりもさらに少なかった。いかえると、七草の知名度は非体験者よりも体験者のほうが高かった。

これらの結果は、体験が七草の知名度を高める役割を果たしていることを示しており、この傾向はとくに秋の七草で顕著である。

ところが、詳細にみると、春の七草では体験のない回答者も、体験者に近い数を記述している（第4図）。この事実は、春の七草を新聞やテレビ・ラジオなどのマスコミで知ったという回答者の割合は、秋の七草に比べると相対的に低いが（第2図）、崔ら（2003）が指摘するように、新聞等で春の七草は秋の七草よりも頻繁に取り上げられるので、それらを通して知るようになった可能性もあることを示している。

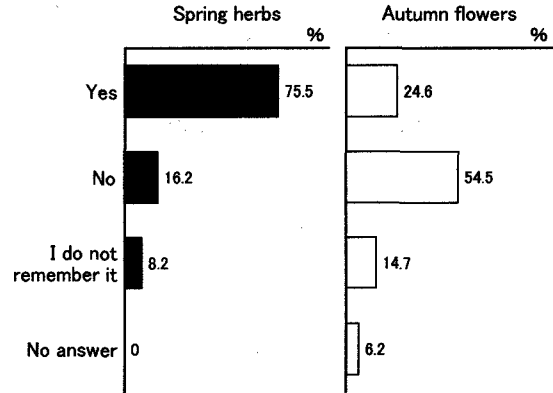


Fig. 3. Responses in percent to the question: "Did you eat rice porridge arranged with seven spring herbs and see seven autumn flowers arranged?"

第3図. 七草粥を食べたことがありますか、飾られた秋の七草をみたことがありますか。

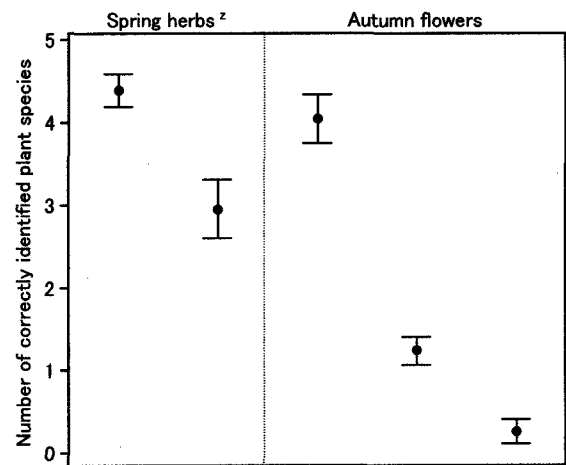


Fig. 4. Influence of experience on numbers of correctly identified seven spring herbs and autumn flowers.

<sup>z</sup> No experience-No knowledge group at spring herbs was omitted from ANOVA analysis because of few respondents

<sup>y</sup> "Experience" means that respondents have eaten rice porridge with seven spring herbs and have seen seven flowers arranged.

<sup>x</sup> "Knowledge" means that respondents learned or heard about seven spring herbs and autumn flowers.

第4図. 七草体験の有無と七草の知名度との関係。

### 4. 体験の時期と場所

以上のように、体験が知名度に大きく関与することが示されたが、その体験は、いつ頃、どこでしたものだろうか。春の七草についての回答をみると、明らかに「小学校に入る前」から「小・中学校時代」までの、いわゆる幼少期である（あわせて80%、第5図）のに対して、「社会人になって」からという回答者の割合は12%と、幼少期までの6分の1以下にすぎない。しかも体験者の93%という圧倒的多数が「家・実家」、つまり育った家庭においてである（第6図）。これは七草粥を食べる機会は家以外にはほとんどなかったことを意味する。

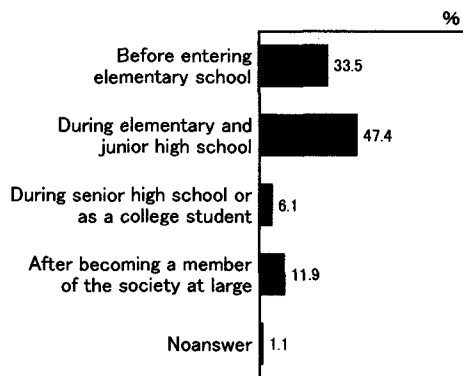


Fig. 5. Responses in percent to the question: "When did you first eat rice porridge with seven spring herbs?"

第5図. 七草粥をはじめて食べたのはいつですか。

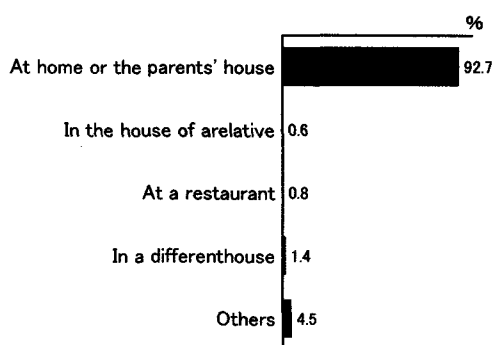


Fig. 6. Responses in percent to the question: "Where did you eat rice porridge with seven spring herbs?"

第6図. 七草粥をはじめて食べたのはどこでしたか。

秋の七草では、直接に体験の時期については尋ねていないが、春の七草にみられたように知った時期（第1図）、場所や媒体（第2図）のほかに、体験者自体がいつ頃知ったか、どこで、どのように知ったかを、整理した結果（データ省略）から判断すると、春の七草と同じように、小・中学校までの幼少期に、家庭で体験したものとみることができる。

### 5. 体験のきっかけをつくった人

以上のように、程度の差こそあれ、春の七草と秋の七草を知ったきっかけには、学校や社会人になってからの、いわゆる社会生活を通してよりも、幼少期に家庭での体験が大きな比重を占めるとみることができる。

では、幼少期に家庭での体験を可能にしたのは誰であろうか。第7図にみられるように、母親が、春の七草をつくり（70%）、秋の七草を飾った（56%）という回答率がもっとも高く、祖母、その他の家族や親戚をあわせても母親にははるかに及ばない。つまり、家庭における母親の言動が、子どもの七草体験とその知名度に大きく影響していることを示している。ただし、秋の七草では自分で飾って体験したという回答者が27%とかなり高い割合であることは注目し得る。

前にふれたように、春の七草の体験率は秋の七草のそ

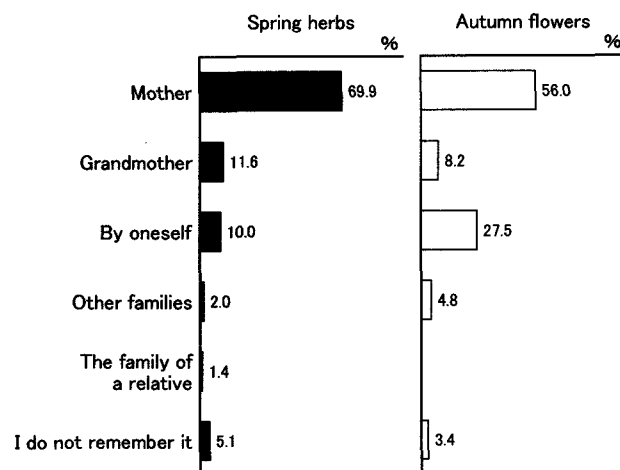


Fig. 7. Responses in percent to the question: "Who prepared rice porridge with seven spring herbs and displayed seven autumn flowers?"

第7図. 七草粥をつくった人、秋の七草を飾った人は誰ですか。

れに比べるといちじるしく高く（第3図）、しかもそのきっかけは母親が七草粥を作ったものであり（第4図）、その体験が春の七草の知名度を上げることにつながっている。その背景の一つとして、春の七草に関する情報が増え（崔ら、2003）、それらの情報に刺激された主婦が七草粥をつくるようになったことも考えられよう。

いずれにせよ、七草を認識し、その行事を体験し、種類を覚えること、言葉をかえれば、七草の伝承にあたって、家庭における母親の役割が飛びぬけて大きく、他の家族、たとえば、祖母やそのほかの家族のそれが小さいのはなぜであろうか。その一つに考えられるのは、核家族化によって祖母やその他の家族との暮らしが少なくなったことであろう。したがって、核家族化が進む以前に育った人では、母親以外の家族の役割が大きいことが予測される。これについては、世代を考慮した分析の課題としておきたい。

### 6. 春の七草と秋の七草にみられる認識度や知名度の差異

前述のように、七草全体でみれば、その伝承には幼少期の家庭生活が大きく影響し、学校や社会の影響は小さいことが明らかになった。しかしながら、少し詳しくみると、春の七草と秋の七草とでは、学校や社会からの影響の受け方がやや異なる傾向がみられる。

たとえば、認識した時期については、「小学校に入る前」と「小・中学校時代」の割合ではいずれも春の七草のほうが高いが、「高校・大学時代」「社会人になってから」の割合では秋の七草のほうがやや高い（第1図）。また、認識した場所・媒体については、「家・実家で」知ったという回答者は、春の七草のほうが高かったのに対して、「学校で」、「雑誌や本で」、「親戚や友達から」という回答は、秋の七草のほうが逆に少しではあるが高

くなる傾向がみられた(第2図)。

これらの結果から、春の七草と比べた場合、秋の七草では、家庭での体験が少なく知らなかったが、幼少期を過ぎて家を離れる機会が多くなってから、具体的には「高校・大学時代」や「社会人になってから」(第1図)、「新聞・テレビ・ラジオで」「雑誌・書籍で」「親戚や友達から」など、マスコミや知人を通して(第2図)知ったこと、言葉をかえると、学校や幼少期以降の社会生活のなかで、家庭外での情報で認識するようになった割合が相対的に高いことがわかる。

このように、家庭では体験のなかった人が学校をはじめとした社会生活のなかで秋の七草を知ったことをきっかけに、自分で飾った人が多くなる(第7図)。その体験が知名度を高くし、非体験者との知名度の違いを大きくしている(第4図)とみることができよう。

以上にみられるように、秋の七草では、春の七草よりも高校・大学以降の社会環境のなかで学んだ可能性が高いこと(第1, 2図)がうかがわれるが、前述の家庭生活の影響に比べるとはるかに小さい。

なお、本稿は、農学部学生や植物と意識的にかかわる機会が多い仕事に関係する市民を対象者としたものである。このような背景をもたない市民がどのように七草文化を伝承しているか、その知名度も含めて比較検討の余地があろう。

## おわりに

七草はその起源から1000年以上も、何らかの形で受け継がれてきたが、本研究の結果からは、七草は、学校を含めた社会的側面からの影響よりもむしろ、主に幼少の頃、家庭での体験を通して伝承されていること、その体験の有無には母親の役割が大きいことが明らかである。しかしながら、今後は父親が子育てに介入する機会が増えることが予想されるところから、その父親が七草を知り、その体験を有しているかどうか、その伝承に関係してくることを承知しておかねばなるまい。

いずれにせよ、衣食住の素材にかぎらず、環境や年中行事のなかの植物、名前やことわざ、デザインなどシンボルとしての植物など、植物とのかかわりはきわめて重要で身近なものであるにもかかわらず、その存在を意識することが少ない。家庭のなかに季節に関連する行事を取り入れ、それを繰り返し体験することが、植物に興味をもち、人と植物とのかかわりを意識し、暮らしのなかでの重要性を考えるきっかけにするうえで大きな意味をもつことを、本研究は示唆するものといえよう。

## 摘 要

春の七草や秋の七草がどのように伝承されているかをアンケートによって探った。もっとも多くの回答者がそ

れらを知ったのは幼少の頃、家庭においてであった。多くの回答者がそれらの七草を食べたり、見たりした体験をもっていた。その体験のきっかけとなる七草粥を作り、秋の七草を飾ったのは家族、それも主に母親であった。その体験をしたのはやはり小・中学校時代までの幼少期であり、その体験が七草について知るきっかけになっていることが伺える。このように、幼少期における家庭での対験は七草を知るうえで大きな役割を果たしており、その機会を作った母親の影響力の大きさがうかがえる。

## 謝 辞

本研究の一部は、KKクリエイトの助成を得て遂行したものである。また、アンケート調査にあたっては多くの回答者のご協力を得ることができた。ここに記して謝意を表す。

## 引用文献

- 青木純子. 1999. 秋の七草, 江戸時代の園芸文化を探る (2). グリーン・ページ 30 : 37-41.
- 崔 至鎔・権 孝姫・松尾英輔. 2003. 農学系大学生と新聞記事にみる七草に関する認知度. 人間・植物関係学会雑誌 2(2) : 6-10.
- Lohr, V.I. 2004. Effect of childhood experience with nature, including planting trees, on adult understanding of trees in cities. *Acta Horticulturae* 643 : 183-187.
- Lohr, V.I. and C.H. Pearson-Mims. 2002. Childhood contact with nature influences adult attitudes and actions toward trees and gardening. pp.267-277. In: C.A. Shoemaker (ed.). *Interaction by Design - Bringing People and Plants together for Health and Well-being*. Iowa State Press, A Blackwell Publishing Company. USA.
- 松尾英輔. 1994. 大学農学部学生にみる園芸経験と園芸の好み - 農芸教育を考えるために. *日本農業教育学会誌* 25(1) : 31-42.
- 斉藤正二. 1977. 秋の七草. pp.85-93. *花の思想史*. ぎょうせい. 東京.
- 斉藤 隆・大川 清・白石真一・茶珍和雄. 1992. *園芸学概論*. 文永堂出版. 東京.
- 天津中医薬大学日本校・神戸東洋医療学院BLOG. 2008. 5.22. [http://blog.k-toyoiryo.com/frontend/modules/article\\_59.html](http://blog.k-toyoiryo.com/frontend/modules/article_59.html)
- 鳥羽禮自. 2006. 七草粥 香る古人の祈り. *日本経済新聞* 1月6日. 文化欄.
- 山本俊光・森 啓一郎・松尾英輔. 2006. 幼少期の住環境や栽培経験の有無と植物の好き嫌いとの関係. *人間・植物関係学会雑誌* 6(1) : 37-42.